Program Notes

オープニング

オープニングはみなさんに対するご挨拶。今日は、練習を終わったあとの団員の様子を紹介します。居酒屋に集い、乾杯、そしてここでも歌で盛り上がります。

「Ein Prosit（乾杯の歌）」はドイツのビール祭り「オクトーバーフェスト」などで乾杯の時に歌われます。特大のジョッキでハチャメチャに楽しそうです。最近は日本のテレビコマーシャルにも登場していました。私たちも負けずに「かんぱあーい！！」　そして話に、歌に盛り上がります。

「Sing Along」は1963年、ちょうど50年前の日曜日のお昼過ぎにＮＨＫで放映され始めた「ミッチと歌おう」という番組のテーマソングです。テレビの中でヒゲのおじさんがこっちを向いて、「一緒に歌おうよ」という感じで指揮をします。画面の中のおじさんたちと共に「Let me hear a melody」と歌ったものです。居酒屋の我が仲間たちはこの歌が大好きです。

「浦安市民の歌」は、1981年の市制施行時に市の発展を祈念して「ふるさとづくり推進協議会」が制作したもので、いずみたくが作曲してデュークエイセスが歌っています。男声合唱曲なので、私たちが大切に歌い継いできました。一昨年の震災の時に、私たちはこの歌の持つ力、心を明るくする、前に向かって進む勇気を与えてくれる力を新たに実感しました。そこで、団設立以来の30年間お世話になってきた市や市民に感謝を表す一環として、この歌の普及活動をしています。市内在住のピアニスト岡田英理子さんに作っていただいた伴奏譜もありますので、みなさんもお仲間や地域の行事などで是非歌ってください。

（谷　達雄）

Ⅰ　男声合唱とピアノのための初心のうた

最初は2001年8月、月刊雑誌・教育音楽「中学・高校版」付録楽譜として中学生向けに作曲されたという「初心のうた」はその後、多くの青少年たちがこの組曲を演奏しました。さて、数々の経験を経た平均年齢65歳（？）の私たちがこの曲から受けた印象は、多分若い方々とは違うものなのではないでしょうか。

印象深いメロディーと無理のない音域、わかりやすい和音、ピアノとのコラボレーション、そしてちょっぴり難しいリズムで構成されたこの組曲を練習していく過程で、木島始氏の語り（詩）による「初心のうた」「自由さのため」「とむらいのあとは」「でなおすうた」そして終曲「泉のうた」これら5曲は、それぞれに異なった情景を見せてくれました。

この組曲の重心をなす「でなおすうた」では、「あるものは野戦の地から、被爆の地から、疎開の地から、尊敬の微笑みに、知識のよろこばしい習得に、ふたりの愛のむつまじさに、帰還した。～はずだった！」と詩（うた）っています。次曲の「泉のうた」では、「ひろい道をつくりだす」と詩（うた）う未来に向かう力強い足取りが、前曲の「はずだった！」落胆を乗り越えているのではないでしょうか。

当団30周年の節目の時にこの組曲を演奏することによって、次の年に向かって更なる歩みを刻む力強い足取りで進めていきたいと思っております。

（根本　隆雄）